曾野綾子作品選集 2

海の見える芝生で

桃源社

〈検印省略〉

曾野綾子作品選集 2

海の見える芝生で　　定価 八五〇円

著者　曾野綾子

昭和五十年四月二十日　印刷

昭和五十年四月二十五日　発行

発行者　矢貴東司

印刷所　太平印刷社

発行所　東京都中央区日本橋蠣殻町一丁目

十二番地　　株式会社　桃源社

(分) 0093 (製) 274009 (出) 5180

1975 ©

曾野綾子作品選集

海の見える芝生で・目次

音戸の瀬戸 7
蒼ざめた日曜日 22
春宵 59
断崖 79
藤 95
べったら漬 110
かな女と義歯 125
孤島 140

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

路傍の芹　154
わが恋の墓標　184
むなつき坂　214
冬の油虫　233
室蘭まで　244
海の見える芝生で　257
解説　鶴羽伸子　277

装幀　原　弘

曾野綾子作品選集

海の見える芝生で

音戸の瀬戸

1

広島に着いたのは早朝であった。

もう旅馴れていて、夜汽車でもけっこう眠れる筈の伊佐も、今度ばかりは桂子の夫、宍戸順三と話をつけねばならぬという気重い仕事が胸にしこっていて、なかなかねつけなかった。名古屋も知っている。名古屋も大阪も神戸も姫路も、駅という駅は殆んど記憶にあるところをみると、やはり駅と駅との間にうとうと眠っただけらしい。

しかし伊佐は、こざっぱりした浴衣を着て、広島駅の改札口の柵にもたれかかるようにしている桂子の姿を見ると、はっと目も頭も冴えるような気がして、鞄を持ちなおすと、足を早めて近づいて行ったのであった。

「どう?」

切符を渡して外へ出ると、伊佐は桂子に尋ねた。

「あなたがいらっしゃることを、宍戸に言っておいたわ。私はもう昨日から雑魚場町の伯母さんのところにいるの」

伊佐はしなやかな桂子の体を、固く糊のきいた浴衣の奥に却ってなまなましく感じた。桂子が和服を着るのは、ふくらはぎのケロイドを隠すためである。伊佐が初めて桂子を見た時には、彼女は細目の黒いスラックスをはいて、どことなく女学生のような感じであった。外出には和服を着ている。長いこと伊佐は、彼女がどんな不自由をしのんでも、足の傷跡だけは見せまいとしているそのいじらしい努力に気がつかなかった。それが男の迂濶さであるのか。いずれにせよ、初めて伊佐が女の脚を見たのは、もう、そのケロイド自体が、伊佐の心境と何らかの深いつながりを持つようになってからのことである。

伊佐は桂子と駅前からバスに乗った。少し不便ではあるが、宿は吉島町の方に定宿がある。それは、ひいては宍戸の家とも近かったからなのであって、桂子が昨日から婚家を出てしまっているときけば、却って別なところの方がいいようにも思われたが、伊佐は迷わないことにした。桂子を奪おうとしている矢先に、小さなことで宍戸順三を意識するというのは、おろかしいことである。

宿へ落ちつくと、がらがら声を出す気さくな女将が早速挨拶に来た。女将の言うところによれば、彼女は東京も浅草の生まれであった。

「今度も、二三日でお帰りですか」
「二三日どこじゃなくて、明日は呉へ行かなきゃならないんだ」
「そんなにお早く！　呉のどこへ行らっしゃるんですか」
「昔の海軍工廠のあたりにね」
と伊佐はちょっと傍らの桂子をふり返ってから、
「会わなければならない知人がいるんだ」
それが、桂子の夫、宍戸のことである。
「夕方には、又こちらへお戻りになりますでしょう？」
「そうは行かないんだ。帰りは呉から乗ろうと思ってるんでね」
「そうですか」
「又来ますよ。おかみさんがいるうちはどうしてもここへ足がむいちゃうからなあ」
「伊佐さんだけですよ。こんなお婆さんを喜こばせてくれるのは」
女将が退ると、伊佐は茶をのみながら暫く無言であった。
それから伊佐は、卓の上にのせられた桂子の小さな手を、かなり自然な態度で愛撫した。
「今度はちょっと、大事だろうなあ。気が重いよ」
「いやだったら、宍戸なんかに会わなくてもいいのよ。商売の話じゃないし、こういう問題はどれだけ話し合ってみたって、決してお互いに納得が行く訳じゃないですもの」
「うむ、そう言えばそうだけど、僕は何でも物事をはっきりしておかないと、いつ迄も寝ざめが悪い方なんだ」
伊佐は苦笑しながら答えた。

桂子の夫の宍戸順三は、早稲田の理工学部を出ると、大山鋼業に就職して、呉工場づめになった。もともと広島の人間であったし、家も広島市内にあったので、その方が万事都合がいい訳であった。
桂子の方は、東京で罹災後、親戚を頼って一家をあげて広島に来てから、そのままそこに落ちついてしまったものであった。幸い原爆の時は家が爆心地から遠かったおかげで、家族の誰も被害を受けなかったが、早朝親戚の家まで使いに行こうとしていた桂子だけが中途でやられた。気がついた時には、不思議にもはいていたもんぺが丸っきりなくなっていて、下に着ていたスリップ一枚、むき出しの脚が火傷していて、そこがケロイドになったという。
しかし、脚のことを除けば、桂子は大変健康な、活潑な少女で、学校でも劇をやればプリマであったし、どんなスポーツにも必らず選手になった。卒業すると、今までそれほどには目立たなかった容貌の方も目立って美しくなって来

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

て、年頃というもののそこはかとないよさを、桂子のようにこんなにもはっきりあらわす娘はめったにない、と言われるほどになった。そして間もなく、彼女は宍戸順三と知り合って烈しい恋におちた。

傷が醜いばかりでなく、原爆娘はいつ死ぬかわからないから困る、というのが、同じ広島で原爆を受けた宍戸の母親の言い草だったと、長い間桂子は怨みに思っているらしかった。

それでもそうした反対をのりこえて、二人は結婚し、間もなく男の子まで生まれた。若夫婦は親と同居していたので、姑と嫁の間にはいつもいくらかのいざこざがあったらしいが、ことの起こりは、舅が死んで、桂子の夫がいくらかまとまった金を自分の手にした時に始る。

宍戸順三は、決り切った勤めだけではいつまでたってもうだつが上らないことを痛感していたらしく、それを元手に商売をしようという考えをおこした。目ぬき通りの八丁堀界隈からははずれても、どこかに小さな店をもって妻に喫茶店をやらせたらと考えたのである。幸いに知り合いが紙屋町に、純喫茶で〝モロッコ〟という店をやっていたので、そこへ商売を覚えがてら、桂子を手伝いに出すことにした。彼女が少しコツを覚えたところで、順三は適当な店を探すつもりだった。

伊佐は同じ頃、勤め先の販売部の仕事で、中国地方を絶えず転々と歩いていた。今にも本社に落ちつけそうに見えながら、なかなか実現には至らない。あまり長びくと却って気が落ちついてしまって、一生こんな生活をしても別にかまわない、と思うようになった。

それと言うのも、伊佐は未だに結婚しそびれていた。間もなく四十だという年になっても、相変らず外勤にこきつかわれているのは、或いは結婚していない、ということが幾らか原因になっているかもしれぬ。結婚しない女は、いくつになっても何となく軽々しくとり扱われるものらしいが、それは男の場合も同様である。独り者は、半端ものである。それも、これほどに年とってしまうと、どうやら他人からは胡散くさく思われる時すらあるらしい。

今までにも、その時々に親しい女がいるにはいた。結婚という形式にのっとらなくてもそれで充分だと思うほどに充実した時もあり、別れたくても、女の方でなかなか離してくれず、ずるずるべったりに不愉快な数カ月を過したこともある。しかしいずれにせよ、妻にしたいと思う女にはめぐり会えなかった。

大切なことは、結婚などというものを、もっと気楽に考えることであろう。思いついたら結婚してみて、具合が悪ければやめる、という風に素直に考えられることの方が、

或る場合には美徳であるということもよくわかっている。けれど何となく実行にうつすことが気億劫だった。

その頃、彼は〝モロッコ〟で桂子に会った。伊佐は酒をのまない。その代わり朝、コーヒーを一ぱいのまないと、目がさめないたちである。自分でも半玄人並みにいれてひとに御馳走するのが好きだった。しかし旅行にまで、コーヒー沸しを持って歩く訳には行かない。モロッコを見つけると、広島へ来る度に、彼はそこへ行くようになった。もっとも、初めはコーヒーのおいしさが問題なのであって、桂子と話をするのが目的になったのは、暫くたってからである。

桂子は単調な家庭生活を離れて、そうした勤めをしているのがたまらなく嬉しそうであった。初めは彼女は型通り結婚しているのを隠そうとしていたが、それが又あまり下手くそなので、伊佐は何となく女に愛着を覚えた。彼は面白がって、桂子に宍戸との恋愛の経緯を喋らせたりしていたが、結婚してみると、宍戸は無口な典型的な技術者肌の男で、うまみも面白味もなく、母親と女房の間に立って、何の精神的な調整をする気もない。この頃では次第に夫が頼りなく思われ出した、ときくと、伊佐は、引くなら桂子とのつきあいは今引くべきだと思わずにはいられなかった。

「本当に、結婚前、私がひとりで宍戸の上にすばらしいイメージをえがいていたっていう訳なの。若かった故もあるけど、私って人間はひとりでお芝居しちゃう癖があるんだわ。自分がするばっかりじゃなくて、相手まで舞台の上の王子さまだと思っちゃうのね」

そこで桂子はくすくすと笑った。どこまで本当におかしく感じているのかわからないような表情であった。

「彼は何だか、魚みたいな人間なの。けろりとしてて」

「男はみんなそんなもんだよ」

伊佐がそう言うと、

「そんなことはないわ、男っていうものが、皆そうじゃないっていうことが、ここに勤めてみてから初めてわかったのよ。少くともあなたは宍戸とは違うわ」

伊佐は黙って煙草を吸い続けていた。それから、

「まあ、君がどれほど男を見直す目が出来たかどうかは知らないけれど、大体、僕は君の御亭主のやり方がおろかしいとは思うな。こういうところへ、女房を出しておいて、何も間違いがおきないと思う方が間違ってるよ」

「そういう人なの、宍戸は。自分さえ納得してれば、他の事も大丈夫と思ってるの。私なんか一人前の人間だと思ってないから、心配もしないのよ」

「男は大体そんなもんだけどね」

同じような答えをくり返しながら、伊佐は苦笑したものであった。

そのまま、伊佐は広島の仕事をすませて東京へ帰って来たが、追いかけるようにして、桂子からは、あなたが来ない店へは出るはりあいもない。又この次はいつおいで下さるのでしょうか、という手紙が来た。

伊佐は帰る道々も、桂子のことを考えていた自分に気がついていた。伊佐に対する好意があったとしても、客は客として、それを上手にさばき切れない桂子の素朴さが、彼は好ましかった。次に出張の予定が決った時、伊佐は早々と〝モロッコ〟に手紙を出して日程を知らせた。再会した時、桂子はいくらか頬がやせて、神秘的な表情をしていた。

「すぐ御返事を頂けなかったから、もういらっしゃらないのかと思ったわ。それでもいいように、心の準備をしておいたの」

「大げさだな」

と笑いながらも、伊佐は、

「もう二度と会わない方がよかったかもしれないよ、生きて再び会わないと決っている人間になら、大抵、我々は悪意はもたないもんだよ」

「そんなのいや」

桂子の目は微かに涙で光った。

その次の時、伊佐は女の脚の傷を見たのであった。傷のあたりの皮膚は固く盛り上って、そこがあかあかと光っている。

「気持悪いでしょう」

「いや、只見る度にケロイドって奴は奇妙な火傷だとは思うけど」

「手術をしようかと、何度思ったか知れないわ」

「いや、あれはよした方がいい。僕は見たことがあるけど、指が開かないとか、足がつれて曲っちゃったとかいうのなら手術した方がいいけれど、いくら別の肉を植えても、所詮は光った透明なガラスに、一部分だけくもりガラスをはめこんだようなことになって、あまり見よいもんじゃないよ」

桂子は、すぐに脚をかくした。

「君は他に、体具合が悪いと思ったことはないの？」

「今のところはね。あなた、やっぱり私が死ぬかも知れないと思うといや？　相手にするのもばかばかしい？」

「いや、死ぬと決っていたら気楽だけど」

「どうして？」

「僕は、十年、二十年先のことを言われるとひどく憂鬱になるんだ。だけど、人間はわかりもしないのに、十年、二

十年先の責任も負わなきゃならないことが多いからね。しかし君が近々死ぬと決っていれば、これは気楽だし、責任ももてる」

怒るかと思ったが、桂子は嬉しそうな顔をした。

それから間もなく、伊佐は桂子からの手紙で、宍戸が伊佐のことを知って非常に怒っている、という知らせを受けた。夫は即日〝モロッコ〟をやめさせてしまったし、買物に行くにも、あなたと会うのではないかと疑って、姑が行く先をきき、あとから調べて歩く始末。手紙もとうてい家では書けないから、公園のベンチで書いた、とあり、字もひどく乱れていた。

「この儘、夫や姑の言う通り、もうあなたとお目にかかってはいけないものなのでしょうか。私はあなたとご一緒にいる時幸福でした。私の死期が決っているなら、気楽に愛してやれるとおっしゃったあなたのお言葉をきいた時、二十年や三十年の命を縮めても平気だと思いました。私はこの頃、子供も重荷です。子供にも気持が集中出来ません。あなたは私をめちゃめちゃにしておしまいになったの」

伊佐は、外部の、或る理解しがたい圧力が、じわじわと二人の周囲におし寄せて来るような気がした。運命とか宿命とかいうようなものではない。周囲の状況においても、自分の気持においても、事態がのっぴきならなくなった、という感じである。

それに伊佐は、桂子が外出先まで、原始的な監視を受けているという状態が可哀そうであった。例えどんなことがあろうとも、そういう状態にはしておけない。きっぱり別れることを宍戸順三の前でも言明して、彼女を自由にしてやるか、或いは思い切って彼女を自分の手許に引き寄せるかどちらかである。

しかし一旦そういうことのあった妻を、夫は本当に許すであろうか。許そうと思うであろうし、再び愛そうとはするであろう。しかし、それは努力と理性を含んだ愛し方であり、どこかに、疑いとためらいをもった許し方である。夫以外の男を、一人でも愛した妻は前科者だ。伊佐は桂子に、前科者のひけ目だけは味わせることもないと思った。

伊佐は宍戸の家を表向きに訪ねた。とりつぎに出た姑らしい婦人には「伊佐と申しますが、桂子さんにお目にかかりたい」とはっきり告げた。彼の態度があまり図々しかったからであろう。老婦人がたじろいだすきに桂子が現れ、二人はつれ立って門の外へ出た。家の中から子供の泣き声がしたので、伊佐は桂子に、

「連れておいでよ」

と言った。ちょっとためらったように彼女は伊佐の顔を見ていたが、間もなく太って色の白い男の子を抱いて出て

来た。
「いくつになるの？」
「一年五カ月よ」
「今に怨むだろうな、この子は。僕は怨まれるようなつもりはなかったんだけどな」
剽軽に言おうとしながら、伊佐は顔をしかめた。
「この子は宍戸が私に渡さないわ。私からとり上げるつもりでいるの。私が悪いんだから、私が子供を育てる権利を放棄しろというの」
「どっちに似てる？」
「面白くらい両方に似ているわ。口許なんか私そっくりだけど、目と眉は宍戸のだわ」
「君が決心ついているんなら、宍戸の家を出て来た方がいいと思って、それを言いに来たんだけどね」
伊佐は子供の頭からずり落ちそうになった帽子をかぶせてやりながら、ためらいがちに言った。
「そう」
桂子はちょっと虚無的な声を出して、
「決心はもうとっくの昔に決ってるのよ」
子供は、ああ――と意味不明な声を出した。川を行くポンポン蒸気の音が、ひっそりした住宅地の真昼の空気を、気ぜわしくかきまわしていた。
「荷物はほんの手まわりの物だけで、何もかも置いておいで」
「ええ」
桂子は夢を見ているような目つきで答えた。

思えば、今日、いよいよ二人で東京へ落ちのびるというところまで漕ぎつけるにも、一年近くの年月がかかっている。おろかしいことに時間を費したと思えれば思いたいのだが、今になって桂子を手放す気には到底ならない。只、一度はっきり桂子を連れて行くことを宣言して、宍戸の怒り方の具合を見確かめなければ、後々まで落ちつかない。伊佐はそれを果しに、明日、呉の大山鋼業の勤め先に宍戸を訪ねるつもりだった。
「今日は午後から、二三軒まわって仕事をすますけど、明日は何時頃行ったら宍戸氏に会えるだろう」
伊佐は事務的に桂子に尋ねた。
「朝、十時半頃がいいんじゃないかしら」
「君は来ない方がいいな。呉で待っている？」
「音戸へでも行って泊りましょうよ、明日の晩は。大山鋼業は音戸へ行く道なのよ。海の傍で一日休みたいわ」
「そうしよう」
「あなたが宍戸と話していらっしゃる間、私、先へ音戸へ

行って待ってる。よく知っている旅館があるの」

2

他の時であったら、伊佐はこういう風景をかなり愛したであろうと思われた。伊佐は絵をかくことが好きである。勿論、只の一度も絵かきになろうと思ったことはないが、絵かきの楽しさだけは充分にわかるような気がする。そしてここは自分でもかいてみたいところであった。

伊佐が桂子と別れてバスを降りたのは、昭和通りというところの何丁目かである。海軍工廠のあとは、今、米軍も殆んどいなくなって、民間の生産会社や造船所やドックが岩壁にそって並んでいる。昭和通りという殺風景な名前もそうしたところから出たのであろう。曇り日でもないのに、そこは後からせまっている断崖のために、日当りも悪く、暗い感じだった。バス停の前には、捕鯨船のキャッチャーボートが数隻ドックに入っており、その隣には、赤錆色のうす汚くて巨大な工場があった。黄色い鉄帽をかぶった労務者が点々と働いていて、そこには人間のみみっちい生活のいじらしさをしみじみと訴えるような何の匂いもなかった。伊佐がこういう、乾いた、ものものしい場所を愛するのは、人間が機械の中に吸収されてしまって、人格も何もなくなるからである。

しかし今日はさすがにその快感を味わう心の余裕もなく、彼はのろのろと工場の前を通りすぎ、広大な屑鉄置場(スクラップ)のひらけたあたりにさしかかった。鉄屑の大きさはどんな小さなものでも持ち上げるのに骨が折れそうにみえた。それは巨船やビルディングや飛行機などが、その骨をさらした墓場のようであった。そうした赤錆色の残骸の中に、巨大な電気シャベルがぬっくりと高く、眩しい陽を浴びていたが、運転手らしい人影もなく静まり返り、シャベルは勿論動いていなかった。

その荒漠とした屑鉄置場を通りこしたところに、珍らしくこじんまりとした、白っぽい建物があった。アメリカ式に鉄条網をめぐらした塀と、建物の間には、やせほそった小さなちゃぼしばさえ何本か植えてある。そこが大山鋼業であった。

伊佐が待たされた部屋は、病院の待合室のように殺風景な感じで、彼は壁にはられたビール会社の大きいポスター兼用のカレンダーや、備えつけの赤い消火器などをぼんやりと見ていた。それから考えをまとめようとするように、両膝に肘をのせて体を前に倒しながら、うつむいて火のついていない煙草をいじり始めた。

五分ほどもたった頃、うつむいた伊佐の目にはきちんと磨いた茶色い短靴が見えた。その瞬間、理由もなく、伊佐

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.